

浄土

1980-6

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回 日発行
昭和二十四年四月二十八日 週刊省 (特別家庭雑誌) 第三三三號
昭和五十五年五月二十五日印刷 昭和五十五年六月一日発行
第四十六卷 第六号



賢者の論理

インド亜大陸の北西部、アフガニスターンからパキスターンにかけて、ギリシャ系の王たちが版図を拡げていた時代があります。それらの王のなかで、仏教に関心を示し、実際に仏教僧と対論を交したメナンドロス王の記録が、『ミリンダパンハ』（ミリンダ王の問い）として残っています。この王は西歴前二

世紀の後半、今のパキスターンのシアルコートに都を定めていました。対話の相手となつたのはナーガセーナという比丘で、ギリシャ的思想の中に育つたメナンドロス王の質問に、仏教的なものの考え方を譬喩を豊富に交えながら説き明します。

それらの多くは、現代人にとってもまことに興味深いのですが、対論の始めにナーガセーナは先ず一般的なルールとして、対論には「王者の議論」と「賢者の議論」があることを述べ、もしもメナンドロス王が王者の論を捨て、賢者の論をもって対論に臨むなら自分分は相手になるが、そうでなければ対論そのものを中止すると申し入れます。ここにいう「王者の論」とは、「王者は対論において一つの事のみを主張する。もしその事に従わないものがあるならば、『この者に罰を加えよ』といって、その者に対する処罰を命令する」

という方法であり、「賢者の論」とは、「賢者の対論においては説明がなされ、解説がなされ、批判がなされ、修正がなされ、区別がなされ、細かな区別がなされるけれど、賢者はそれによって怒ることがありません」という対論の態度であります。

ところで、我々が今日の世界をながめてつくづく感ずることは、いかに「王者の論」が今の世に多く行なわれているかということです。アメリカがたとえば、イランに対してとって来た態度はその典型的なものであり、また、アフガニスターンに侵入したソ連の論理もまた王者の論理以外のなにもものでもありません。更に小さな一つの国、一つの家の中をながめてみても、我々はしばしば王者の論理がまかり通っている実情に気がつきます。自分らのみをよしとし、ほかの多くの人々のためを思わない独りよがりの論理もこの部類に入るといえましょう。日々をふり返って、「賢者の論理」に生きるむずかしさをしみじみと感じます。

(佐藤良純)



六月号



東岸と言うは、すなわちこの娑婆
の火宅に喩う。西岸と言うは、す
なわち極楽の宝国に喩うなり。

——『選訳本願念仏集』

定本法然上人全集 1 P.120 -1)

目次

法話

感じたこと……………大橋英正……(2)

特別寄稿

思い出あれこれ……………渡辺杜水……(10)

〈随想〉ほとけとの出会い(八)……………佐竹隆三……(6)

井の頭公園散歩吟……………河野喜雄……(15)

■随想■伊豆高原の博物誌……………木下隆一……(20)

文字・言葉の国〈中華〉……………吉田光覚……(25)

浄土句集……………一田牛畝選……(28)

〈句会だより〉善導大師遠忌吟行の記……………塩山三九……(31)

〈表紙のことば〉寂浄光……………土屋正男……(30)

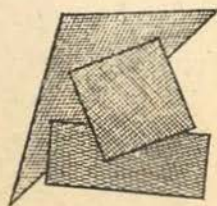
〈表紙裏・巻頭言〉賢者の論理……………佐藤良純

念仏ひじり三国志④——法然をめぐる人々……………寺内大吉……(37)

表紙 土屋正男画

カット 大正大学美術部

法 話



感じたこと

おお 橋 英 正
おし えい しょう

(東京・虎の門長谷院住職)

〇い遠忌

(激動の八十年代)

ことになりましたが、激動の八十年代を表徴するかのようになり、いろいろの方面で、さまざまな動きがみられます。それらの動きについてみますと、一向に鎮静や安定の様子がみられないのはどうしたことでしょう。とりわけ、新聞の報道、ラジオ・テレビのニュース番組をみたり聞いたりするにつけても、物価の上昇による生活の不安定・汚職・詐欺・殺人・盗みと言った、ほんとうに暗いニュースが毎日のように伝えられています。ものの世は文字通り日進月歩、いや秒進分歩のスピードでも、あの凄惨な勢いで進んでいます、これに反して、こころの

世界については、自分の内なるものを育てあげ、磨きあげようという意欲に欠け、そのことに関しては、全くの無関心・無感動と言わうのが現状ではないでしょうか。また自然界との接触、自然にとけこもうとする気持ちに欠けていることです。いわゆるものの豊かさとは、うらはらに、こころは至極貧しいということです。

ひとそれぞれに、人間として生活を営むについて、いろいろの考え方や立場があろうかとも思いますが、心を同じうしてみんながみんな、一つの道、一つの方向にむかって進むことは、なかなか至難のことと言えましよう。しかしながら、こと信仰の世界にあっては、その奉ずる教えを中心として、進む方向や進むべき道を同じうする、同信となるものであり、なかんずく、わたくしど

もにしてみれば、仏・法・僧の三宝に帰依し、浄土宗のお導きによって、縁が結ばれた同行であると言うことです。増上寺ご法主藤井大僧正台下のお導きによりますと、善導大師の観經疏の十四行偈に示された、「各発無上心」、「共発金剛志」、「同発菩提心」の、おのおの・ともに・おなじく菩提心をおこすところの、それぞれが善き友であり、究極するところ、「願共諸衆生、往生安樂国」に帰一される訳であります。

(ご遠忌) このような、複雑多岐にわたる激しい動きの生活の中で、この昭和五十五年は、わたくしどもにとっては、生涯にたった一度で二度とない勝縁に恵まれた年であります。と言うのは、去る三月には京都知恩院をはじめとして三大本山において、四月には東京増上寺で、善導大師一千三百年遠忌法要がそれぞれ厳修され、これを中心として多彩な各種行事が併せ行われましたことは、まだ記憶に新しいところで、まことに意義深いこととであります。他の各地においても、それぞれの規模で行われており、まれ五月には、中国の香積寺において、日中合同の大法要が営まれたことでした。これまた

日中両国にとって大いに意義のあることと思います。

(信機信法)

善導大師のみおしえにつきましては、あらゆる機会に、多くの方々からお示しを受けましたことですが、これも藤井ご法主のお導きによりますと、さきの善導大師十四行偈の中に、「我等愚癡身、曠劫来流転」とありますが、これは、同じく観經疏散善義深心積の「自身は現に是れ罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた常に没し常に流転して、出離の縁あることなし」に対応するもので、まさしく信機について言及し、「今逢釈迦仏、末法之遺跡、弥陀本誓願、極樂之要門」は、正しく信法の「かの阿弥陀仏四十八願をもて衆生を摂受したもう。疑いなく慮なく、かの願力に乗じて定んで往生を得と、決定して深く信ず」ることとなります。徹底した自己内省と絶対的な阿弥陀仏への帰依合掌、これが称名念仏生活の第一歩であると同時に究竟するところではないかと考えられます。

(末法濁乱)

「偏に善導一師に依」られた宗祖法然上人によって説示されたところの「時処諸縁にこ

の願をたのみ」ただ一すじに称名念仏する尊い教えが開示されてから、数を知らぬ多くの人びとがその法悦にひたることができました。「浄土門の修行は、末法濁乱の教えなるがゆえに、下根下智のともがらを器となす」とのお言葉の通り、機を信じ、法を信じて、わたくしども後凡は、「念念称名常懺悔」の生活に徹したいものであります。

○況んや悪人をや

(入我我入) この間、何とはなく本を見ている時、「入我我入」と言う文字が目にとびこんで来ました。「仏、我に入り、我れ、仏に入る」と漠然と理解していましたが、辞書を見ますと、「如来の三密(身密・口密・意密)我に入り、我が三業如来に入り、即ち如来の三密と衆生の三業と彼此相応互入し以て一切諸仏の功德を吾身に具足するを言う」とあり、「本尊我が身中に入ては我を加持し、我れ本尊の御身の中に入ては本尊に帰命する」とも言い、別の本によれば、「仏の大慈悲心と衆生の信心とが融即相入する状態をいう」と説明しています。それについても、直接には、これと関係ないかも知

れませんが、深く心に刻みこまれているものとして、「三縁」が思い出されます。

(親縁) 観経疏に三縁が説き明かされていますが、その中、親縁については勅伝第二十三にも、「三縁の中の親縁を釈し給ふに、衆生ほとけを礼すれば、仏これを見給ふ。衆生仏けをとなふれば、仏これをきき給ふ。衆生仏を念ずれば、仏も衆生を念じ給ふ。かるがゆへに阿弥陀仏の三業と、行者の三業と、かれこれひとつになりて、仏も衆生も、おや子のごとくなるゆへに、親縁となづく云云」とあって、「彼此の三業あい捨離せず」ということになり、ありがたい仏の護念の益を蒙ることになることは、しばしば教えを受けたことでした。

(罪人なお生る) 昨年のですが、毎月二十四日につとめられる増上寺別時念仏会の時、いつもご法主自らお出ましになり、尊いお話しをいただくのですが、たまたま、ご親教の為、かわって勤めさして頂いたことがあります。その節、懺悔について述べさして頂きましたが、ご法語「罪人なお生まる況んや善人をや」を結びと

しました。その時同信の築地泰賢氏より、「ご法主が既にテレビ第三チャンネル宗教の時間に『善人なおもって往生す。況んや悪人をやの事』で法然上人の深意を述べられたが、そこまでゆくには、ご法主ほどの宗教体験が積まれなくては、『況んや悪人をや』はなかなか口に出来ないものか」とのきびしい感懐を寄せられました。このことから、何気ない言葉の中にこそ自分の身につかないものは、いつの間にか剥げ落ちて、もとのままの愚癡の生地が出るものであると大いに反省させられました。後日、梶村昇先生の「法然のことば」をみる機会があり、その本の中に、「教団をささえた人々―源智」の項に、「善人尚以って往生す。況んや悪人をやの事口伝これあり」が示されてあるのをみて、再び、恥づかしさと驚きと喜びとの交錯した複雑な気持を味わいました。

（況んや悪人をや） 資料をみる機会に恵まれぬ俣、先生のご本を引用させて頂きますと次の通りです。

善人尚以って往生す。況んや悪人をやの事口伝これあり
私に云はく、弥陀の本願は自力を以って生死を離る

べき方便ある善人のためにをこし給はず。極重惡人無他方便の輩を哀みてをこし給へり。然るを菩薩賢聖もこれに付て往生を求む、凡夫の善人も此の願に歸りて往生を得、況んや罪惡の凡夫尤も此の他力を憑む可しと云ふ也。惡しく領解して邪見に住すべからず、譬へば（本……脱字か）凡夫の爲にして、兼ねて聖人の爲にすと云ふが如し。能々心得可し心得可し。初めに三日三夜、余之を読み、後一日之を読み、後二夜一日之を読む。（醍醐本「法然上人伝記」三心料簡之事・原漢文）

惡人正機と言うことは、法然上人よりもむしろ、親鸞聖人のものと思われ、「善人なおもて往生をとぐ、いわんや惡人をや云云」を頭に浮かべがちですが、「口伝これあり」と但し書きがあるだけに、法然上人のこのお言葉を拝承することは、まことに有難いことと思います。

「世もひろく人もおおければ、山のおく、林の中に、こもり居て、人にもしられぬ、念仏者の貴く目出たき、さすがにおおくあるを、わがきかず、しらぬにてこそあれ」との法然上人のお言葉が、身に沁みる昨今であります。

〈随想〉

ほとけとの出会い (八)

佐^さ竹^{たけ}隆^{りゅう}三^{ぞう}

(大正大学教授・医博)

生れ生れ生れ生れて生の始に暗く
死に死に死に死にて死の終に涙し

(『秘蔵宝論』序)

空海のこの言葉は彼の全著作の中でどれほどの比重をもつものかは知りませんが、彼のこの悲痛な叫びはわたくしの胸に深く刺さって、無限の時間の中の微小な人間存在のはかなさを今さらのように感じさせます。

発達心理学的に言つて無限という概念は何歳頃から芽ばえるものかは知りませんが、わたくしの場合には小学生の低学年の頃であつたように思われます。

いたずらを叱責されて罰として暗い土蔵の中に閉じ込められ、いくら泣き叫んでも出して貰えなかったとき、漠然とした未来への不安の中で、わたくしはじめて「無限の時間」と対決せざるを得なくなつたようであります。今から考えて、それは明確な意識を伴つたものではありませんが、漠然とした不安と恐怖に満ちた「時間の無限性」を感じ、不思議にも地獄・極楽絵図を同時に思い浮べていたようであります。

それ以来この体験を契機として、快活な幼年時代は終りをつげ、暗いかげをもつ少年へと育つていったようであります。人間は死んだあとどうなるの



か、その後も無限に時間が続くとしたら今生きていることにどんな意味があるのか——この恐るべき疑問が時々わたくしの脳裡をかすめ、繰り返えし繰り返えしこの恐怖のため夜も眠れないことがあったように思います。結局人間とはひとりぼっちの悲しい存在なのだということに落ちつき、これ以上この問題を考えるのは止めようという安全弁にしがみつきます、自然にこの課題から遠ざかっていったようでありますが、この常識的な解決では完全にこの問題から解放されることはありませんでした。

いつの頃からかは記憶にさだかではありませんが、毎年除夜の鐘に耳を傾けてじっと聞き入るとき、いつもきまって「空間と時間の無限性」を感じるようになりました。虚空の彼方に余韻じょうじょうとして消えるでもなく消えぬでもなくかすかにひびき渡る鐘の音にじっと耳を傾けると、不思議な心の安らぎの中に、一つの暗点として「無限の中の微小な人間の存在」という観念が生じ、それがアトマン、ブラフマンという想念と、無限の時の流れという観念に結びつき、それがまた唯識哲学とも深

くかわり合って、「今、ここに生きている」ということの不思議さと有難さを感じるのであります。二十年前ヨーロッパに留学した時にも、チューリッヒで教会の鐘の音を聞いた時同じようなことを体験しました。異郷の空で、孤独と望郷の念にかられながら聞く教会の鐘の音は、一層感慨が強かったように思います。

ミルチャ・エリアーデの「聖と俗」の中に、「聖なる空間」と「聖なる時間」について述べられています。聖なる空間はともかくとして、聖なる時間については実感としてわたくしになかなか納得できませんでした。

しかし、ブルックナーの交響曲を聴いた時、わたくしは不思議な時間が存在することにはじめて気づきました。ブルックナーは日本ではあまり知られていない作曲家の一人で、彼の交響曲は長過ぎて退屈であるとか、単調であるとかいった批評をしばしば耳にします。だが、このような非難は、彼の音楽の本質を理解しないところから生じていると思われま

音楽は本来「時間芸術」であると言われます。音楽は時間の中で展開するものであり、またそれぞれの楽曲によって個々の時間をもつと言えるでありましょう。アダージョ楽章では時間ではゆっくりと経過し、スケルツォ楽章では時間はリズムミカルに勢いよく進行してゆきます。

このようにすべての音楽はそれぞれひとつの時間をもっているのですが、ブルックナーの交響曲は二つの時間を持っていると言えると思います。その中の一つの時間は、他の音楽の場合と同じ意味の時間ですが、もう一つの時間というのは、このような普通の音楽時間の根底に存在している時間、であります。

この第二の時間は、個々の音進行には左右されません。しかしながら、いわば交響曲全体にひろがって存在します。それは刻々に経過しつつあるが、あたかも静止しているかのようにあります。有限であるのに、何か無限のように存在しています。

わたくしたちは毎日いそがしくあくせくと働いておりますが、このような時は時間も早く経過しま

す。しかし、休暇でもとって温泉にのんびりつかっている時は、時間もゆっくりと流れています。だが、このような各個人個人の時間のほかに、もっと広く自然や大地のごとき存在も時間の経過の中にあります。そして、大地のもっている時間はむしろ悠久・永遠とも言うべき無限性を持ち、静止とも言えるようなおらかさをもっています。この大きな時間の上で、実はわれわれはこせこせとわれわれの時間を追い、時間に追われているにすぎません。

この日常の生活時間の比喩が、ブルックナーの時間と関係があると思われます。ブルックナーの交響曲について、宇宙的とか宗教的とか神秘的とか言われる性格は、この第二の時間性の体験を一言で表現しようとする努力の現われにすぎないと思います。

彼の第七交響曲第一楽章の冒頭の主題の演奏からして、その表情は驚くべきものであります。さきに述べたブルックナーの時間は曲頭から音となっています。それはアルプスの山頂から四界を見おろす雄大さと悠久さがあります。そして曲が進むにつれて天地に響きわたる音響の充実感に恍惚となることに

できるでありましょう。

アントン・ブルックナーは、一八二四年九月四日に生まれて、一八九六年十月十一日に世を去ったオーストリアの作曲家であります。ブルックナーの音楽を考えるにあたって、彼が熱心なカトリック信者であったこと、非社交的な閉鎖性の気質であったことが有効な手がかりになると思われますが、彼は一生涯作曲すること報酬を受けとったことがなく、しかも一度作曲した作曲に、とりわけ交響曲では、たびたび改訂を加えることを常とした完璧主義者であったことなども見過ごすことはできないと思います。清貧の中で自分の理想を貫いた人という人間像がわたくしの頭にうかんできます。

ブルックナーの音楽に魅せられて以来、わたくしはしばしばこの神秘的な時間のなかで瞑想するようになりました。人間——意識的存在としての人間とは何でしょうか。永遠の今を体験したと思ったのは錯覚にすぎないのでしょうか。とにかく考えれば考えるほどわからなくなってしまう。

「無限」という概念との対決の中で、わたくしは

一つの面白い事実に気づきました。不思議なことに、自分が生まれる以前の無限の過去については一向気にならないにもかかわらず、自分の死後の無限の未来のことが気になってしかたがないという事実であります。そして、無限の未来について考えるとき、そこに不安とか恐怖の感情がつきまとうのであります。それは、何故でしょうか。

人間とは本来「未来への存在」であり、つねに未来に向って生きている存在であり、「死への存在」であります。わたくしたちは空間に対しては身構えることが可能であり、何等かの準備をすることもできます。しかしながら、時間に対しては全く無力であり、身構えや準備は不可能に近く、気がついた時には徒らに時間の経過したことを嘆くのみであります。

時を忘れるという何かに没頭した時が或はもっとも幸福な時なのかもしれません。冒頭の空海の悲痛な叫びが再び胸に刺さって、人生の無常を感じるのみであります。

(つづく)

特 別 寄 稿

思 い 出 あ れ こ れ



わた なべ と すい
渡 辺 杜 水

(浄土宗西山深草派
大本山円福寺法主)

永しとも思はず生きて来し喜寿の
今日うれしともまたさびしとも

本山というもひとりの明易し

いまの感慨である。

さて、『浄土』誌のことであるが、用あって自坊に帰ったとき、書棚の片隅にあった古い『浄土』を見つけて懐しくなり持ち帰った。それが昭和十年の第一巻第五号(九月号)と第三巻の五、八、十号、第十巻の第七号であった。それによって創刊第一号は昭和十年五月ということがわかった。爾来、四十六年の歳月を歩みつづけてき

本誌『浄土』は縁あって創刊当時から購読している。といっても内容などの記憶はさだかでないが、書棚その他を整理すれば全四十六巻五百五十余冊がどこかに在るものと思う。しかし、今はその前住地を離れて当山に入寺してきたので書籍などの整理もできない。出家、入弟、得度以来、七十年近い歳月を過してきた自坊から身一つで、僅かに坐右のものだけを持ってきた現在である。尤もそれが「さいわい」して、身がる氣がるの毎日の山坊生活、寺務も法務も少ないのを是れ良しとして余生をたのしみ、ついに喜寿という今日を迎え自祝しているものの、内心いささか忸怩たるの感なきにしもあらず。

ている「本誌」の行蹟はたえられていいと思う。こうして今、手許にある古い『浄土』誌を見てみると、埃にまみれ、色褪せてはいるけれども、目次の筆者、題名など目を見張るほど豪華なものである。また記事外の広告（書籍）にもなつかしいものが一ぱい出ている。

まず、第一巻第五号の巻頭論文は大僧正岩井智海氏の「行けよ、この道」と題するもの、佐藤賢順氏の「彼岸への志向」萩原雲来氏の「梵語の話」中村弁康氏の「一枚起請文講義」その他、相馬御風、香取秀真、岡本かの子等の随筆、そして文芸面では「黒谷法然上人伝」佐藤春夫、「旅路の芭蕉」宇野浩二の連載物大作を初めとして、北林透馬の朝鮮説話「好意の結果」山中峯太郎の「独身医師の生涯」など、盛り沢山の読物がぎっしりという感じで、八十頁金十銭送料一銭一カ年金一円となっている。発行名は今と同じ「法然上人讃仰会」であるが、所は芝公園明照会館となっている。

中でも特に私の注意をひいた筆者は佐藤春夫、宇野浩二であって、共に今は亡きかつての文豪作家である。

佐藤春夫「黒谷法然上人伝」は『十六門記』を意識したものであって、この号には、第八回修念仏往生門（念

仏往生を信仰修行し給ふおん事）、第九回善導来現授教門（善導和尚が来り現はれて教を授け給ふおん事）、第十回進念仏往生門（念仏往生を勧進し給ふの事）、以上の三門記（挿画二）が流暢に意訳演繹されて十頁になっている。当時のこととて、全文ふりがな付きの活字である。そして、その中でも機（ひとがら）（ひと）万機（たれしも）などとユニークな振り仮名がつけられている点に深く心をひかれたものである。

『十六門記』については、現在の『浄土』に連載中の寺内大吉「念仏ひじり三国志」七十二にも、くわしい考証と一部の解説が出ている。法然上人の伝記としては『勅修御伝』という『四十八巻伝』と共に有力な史料となっているのが、この『十六門記』である。

なお、寺内大吉氏は最近号において、善恵房証空上人を取り上げ「法然をめぐる人々」の中の重要な存在として登場させてきたことは興味深い。この新しい宗教歴史小説において、西山証空上人がどこまで活躍するか、今後に刮目している。最も早く法然に入弟子得度、剃髪した西山証空は爾来、法然入寂まで二十三年間、常に随従して学習、体得した唯一の愛弟子である。特に『選択集』

編集の場に加わり勸文の役を完うしたことは伝記に明らかなことである。そして『選択集』の願主、藤原兼実公の招きにより翌年、その代講をしたと伝えられている。時に証空は若冠二十三歳であった。法然門下の俊逸は数多あるが、その殆どが中年転向の人師であることなどと思えば、証空は特異の弟子であったことはたしかである。したがって「念仏ひじり三國志」の中において、「法然をめぐる人々」として、これから大きく動くであろうことを期待している。

佐藤春夫氏は詩人であり文士であって『田園の憂鬱』を出世作として大正年間、すでに名を成していた。かつては谷崎潤一郎氏と係争のこともあり文壇の雄であった。それが早くより浄土教に帰依し、殊に法然上人の伝記に傾倒し、当時の中里介石氏とともに読物としての「法然伝」を著作し世に問うている。その中の『掬水譚』は法然上人別伝と副題し、昭和十年頃発刊されたもので、当時としては珍しい豪華版(定価四円五十銭)。この本が昭和十六年に覆刻版として刊行されたが定価八十銭である。この並本の「はしがき」によれば「小杉放庵の挿画入りのぜいたくな体裁をもって小部数を出したが、作

の普及を目的として覆刻した」といい、更に、「法然上人が教への一端を知って人生行路の途上、一掬の清泉をむすぶ思のあった自分は敢てこの作を成した。説教は自分の任ではないから、ここに日本的仏教の精髓をよく伝へ得たとの自信もない、況んや上人の面影をや。(中略)所謂歴史小説として功をおさめ得ずとも、亦、いささか譚詩の一体を創めようとの志はあったのである」と著者みづから抱負を述べ記している。

その後も佐藤春夫氏は『極楽から来た』と題して法然上人伝を長篇小説化しており、本誌にも時折りの随想などを絶えず寄稿している貴重な筆者であった。

次ぎに宇野浩二氏に就て、その年譜によれば、昭和十年、浩二、四十四歳、六月「夢の跡」を『中央公論』に発表、九月「旅路の芭蕉」を『浄土』に連載(翌年三月完結)、十月「終の栖」を『中央公論』に発表とある。

そして翌十一年の春浅き雪の朝、二・二六事件が東京に起き、翌十二年、夏には蘆溝橋事件により日華事変となり、上海に日本兵が上陸し、世の中は日ましに暗くなってゆくのである。この年、『浄土』は第三巻となり、佐藤春夫氏は同誌に「通俗方丈記」を連載し、説苑とし

ての巻頭論文は、真野正順、佐藤賢順、中村弁康、大野法道など錚々たる人師が論陣を張り、あたかも壇上に獅子吼するの観ありというべし。また、富士川游(文博、医博)、中野尅子、稲垣足穂という有名人も筆を執っている。

また、その年頃、歌壇(与謝野晶子選)俳壇(太田耳動子選)が設けられ特に選者がすばらしいと思った。

当時の『浄土』誌の広告ページにも今昔の感、甚だしきものがある。一例を挙ぐるならば、中村弁康『法然上人の信仰生活』四六版一三〇頁三十銭、藤井実応『法然上人法語抄』菊半截一五〇頁三十銭、中里介山『法然上人伝』六十銭三六版、二五〇頁美麗クロス装、これは『勅修御伝』の要訳であり、特製本であった。

昭和十九年七月号ともなれば、戦争激烈の真只中に入り、『浄土』誌も表紙共二十頁の薄いものとなり定価十二銭送料二銭となっている。しかし、その目次を見れば、吉田絃二郎、佐藤春夫、貴司山治、生田花世、中村弁康、伊藤宏天等の名が並び堂々たるものである。しかし、その内容は流石、時局を反映し国民総動員の戦争一辺倒になっているのは仕方ないことである。もう歌壇

も俳壇もない、ザラ紙の印刷、息も絶えだえに戦争に逐われていくという哀れな姿である。

伊藤宏天師はその後、当地の大樹寺(岡崎市田鴨町)に住し、戦後の宗教活動にめざましいものがあつたが、間もなく他界された(大本山円福寺は、岡崎市岩津町)。

その後、大樹寺貫主に藤井実応師がなられ、数年にして東京・芝の増上寺へ榮進された。その晋山式には私も列席し、江戸木遣衆と稚児天童たちの華やかな行列にも宴席にも列した。大樹寺の現住は藤吉慈海師、花園大学その他の要職にあつて多忙のため容易に会うこともできない。

この岡崎市は愛知県のほぼ中央にあつて、徳川家康公発祥の地、城も再建して公園となり、矢作川の支流に接し、「お城下まで舟が着く」と歌われている小都市である。

大樹寺は三河地区の大山(成道山)観光寺としても有名で、家康が九死に一生を得たという門(かんぬき)が保存されており、その他多くの秘宝が資料館に展観されている。

浄土宗寺院としては荒井山九品院があり、布教師会長

であつた伊藤超山師は青年授戒にも力を入れて地方教化につとめていたのに惜しくも一昨年、急死された。同じく伊賀町の昌光律寺は大運師の教化が余薫をひいて律派の持戒堅固な寺である。わが浄土宗西山深草派に所屬する寺も岡崎市内に三十八カ寺あり、その中に檀林三、大本山一(岩津町円福寺)、檀林は崇福寺(中島町)法藏寺(本宿町)大林寺(魚町)である。深草派寺院の六割ほどが三河地区にあるところから、現在の大本山円福寺は京都南本山をこの地に寺号を移し、従来の檀林妙心寺は京都蛸薬師に移した。それは明治十六年のことで、それ以来円福寺は大本山として教学、布教の中心となつて今日に至っている。樹齡三百年にもなるらしい樟の大木が境内の要となつて高く繁茂し枝を垂れて緑蔭をなし憩いの場となっている。経藏は昭和初年のものであるが、鐘樓門と山門は妙心寺時代のものであり、飛騨の工人左甚五郎作といひ伝え、彫刻の鯉が水田を毎夜荒らしたというので、鯉の目をつぶして難を除いたと伝説している。その他、松平、徳川の古碑墓石を存し史実を保っている。

本尊阿弥陀仏は法然上人が四十二歳のとき京洛において開眼された仏像と伝えて、今も厄除け弥陀如来として

近隣の人たちに尊崇されている。さらに唐の善導大師直筆という利剣名号の大幅が秘藏されている。京都百万遍にもあるという利剣名号と同じ立派なものである。

明治三十六年生れの私は本年、喜寿ともなり余生に恵まれて仏祖に仕える仕合せを満喫している。かつては大正五年から五カ年間、この地、岡崎の県立第二中学へ通つたが、それも既に六十年前のことである。僧籍に入つたおかげで当時の中学校にもゆくことが出来たのだ。村の百姓の伴は小学校六年が関の山で高等小学へ上るものも僅かであつた。まして中学へ行く連れは一人もなかったのに、寺の小僧になつたことから師僧父母の協力でもつて二十キロの道を八八車に布団と机を乗せて運び岡崎の法類寺に止宿し、五年の業を終え京都の学校にも入り今日の自分が恵まれたのである。有りがたしである。

惜しみなき命の喜寿の春惜しむ

杜水

花吹雪あびて知足の人生観

"

山門の前春泥や下乗石

"

廻廊の木目にささる樟落葉

"

鐘樓門くぐれば庭の楠若葉

"

井の頭公園散歩吟



河野喜雄
こうの よしお

(文芸評論家
「雲母」同人)

私は、会社の方は、「半週出勤」ということになって
いるので、あとの半週の方は専ら在宅する。

昨年、家内が癌で亡くなったので、家には目下次女
(学芸大卒・立川小学校勤務)しかいないが、七時過ぎには
もう家を出て了うので、あとは私一人であり、会社出勤
の日は、朝食後出勤して、夜は大抵何かの会があるの
で、帰宅は十時過ぎになることが多いが、在宅の日は、
会や何かがない限り、一日中在宅する。

専ら読書、執筆をしているのだが、朝から晩まで坐り
つきりでは堪らないので、夜はテレビなども観るが、昼
は大抵十二時過ぎから家を出て、緩歩約十五分程度の井

の頭公園まで行き、公園の池を一廻りして、池畔の茶亭
で酒かビール一本とうどんで昼食を済まし、また元の徑
を歩いて帰ってくるが、時には旧玉川上水路兩岸の小徑
を、公園から三鷹台駅辺まで、季節的風物を楽しみなが
ら帰ってくる。

そして、私のライフワークは芭蕉研究であり、従って
俳句も一応は作るので(「雲母」同人)、その散歩と、池畔
の独酌昼食の間、どうしても囑目吟を作ったことに
なる。

しかし、俳句というものは、一番始めに作った句、い
わゆる「初案句」というものが、そのまま納まるもの

では決してない。

芭蕉が、「舌頭千轉」と言っているように、その対象を千遍にもなるほど眺め直し、作り直ししなければ、真の俳句的俳句というものは、決して成立するものではない。

世界の最短詩型と言え、おそらく中国の「五言絶句」二十字詩であろうが、中国文字は表意文字であるから、二十字と言っても、わが国の短歌三十一文字よりは、少々長いことの方が多い。

ところが、俳句は、表音文字僅々十七字なのであるから、これこそ、真に世界最短の詩型であり、最短なるが故に、それはまた最高・至難の詩型である。

だから、「俳聖」と言われる芭蕉は、能くこの俳句のむづかしさを熟知して、

一世の内、秀逸の句、三、五あらん人に作者也。十句に及ばん人で名人也。

（森川許六、「俳諧問答青根ヶ峯」）
と言っているのである。

だから私は、井の頭周辺散歩、独酌の際の作句は、必ず手帳に書留めておいた上で、何度も何度も作りかえ

る。

その実例をお目にかけて、読者のご高批を仰ぎたいと思う。

冬中、寒い日でも、天気さえよければ、外套を来て散歩に出た。そして林中を歩いて、その小径の落葉が、晩秋以降踏まれ続けて粉となり、粉の舗道のようにになっているのを見て、直ちに、

寒林の小径落葉の粉と踏まれ

と作った。

しかし、これでは、舗道のように感じが出ていない。それで坐五を、「粉と舗かれ」と一応直したのであったが、「踏まれ」か、「舗かれ」か、大分迷った。

「粉に踏まれ」で、一応は、「粉の舗道」の感じが出ていないことも思ったのであるが、矢張り「粉と舗かれ」の方がよい、と考え直した。落葉の粉のようになったのが、わざわざその様な小径などに舗かれる筈がないから、その「舗かれ」たようにしたのは、矢張り「踏まれ」た結果であることが、当然に推測せられるからである。

そして、最後に、その全体の句形を考えた。

七字の「小径、落葉の」が、「小径の落葉」とも考えられるし、坐五も「粉に、舗かれ」とも考えられる。

そして結句、七字は「小径の落葉」を採り、坐五は「粉と舗かれ」を採った。「の落葉」の方が素直であり、「と舗かれ」の方が、「粉となつて舗かれた」の意味がハッキリするからである。

「次の句は春の句となつた。

井の頭公園を出て、国鉄線の北側へ廻ると、新宿に次いで、中央線沿線の大都市となつた武蔵野市吉祥寺の一大商品街なのであるが、散歩の帰りに、そこで買物などをして帰ることがある。

散歩帰りなのだから、勿論ユツクリと、あちこちを眺めながら歩く。句の種探しもしているのである。

そして、不図見上げると、ビル街の空に昼月がかかっている。よく晴れた日で、暖たかくもあったので、その月の薄く白ぼけた色にも、何かもう冬ではないものが感じられた。

そこで、先づ、取敢えず、

ビル街にかかる昼月春の色

と吟出したのであるが、その七字の「かかる」が冗語であることには、すぐ気がついた。「ビル街の月」とさえ言えば、「ビル街にかかっている月」であることは、すでに明瞭であるからである。

さて、その「昼月」であるが、「昼」とのみでは、時間的に大分長い。その時間をもっと限定することが必要である、と考えた。昼食代りを済ましての帰り路であるから、午下り、すなわち、「午下」である。「午下の月」とすると、単に「昼月」というよりも大分ハッキリするが、「ビル街の午下の月」だけは、まだ字足らずである。そこで、その「月の形」を考えた。

月は、十五夜以前は大体昼間から昇るから、東空にかかるが、以後は殊月として西空にかかり、その月形はともにも、いわゆる「片割れ月」である。私は吉祥寺商店街の東空にそれを仰いだのであって、その月形は、恰度半月であった。七・八日頃の月である。

そして、そこまで考えた上で、一句を、

ビル街の午下の半月春の色

とし、一先づこれで打切った。

もう一句、独酌の茶亭での一句がある。ユツクリ飲み

ながら、茶亭前の池畔の小径を行く人々と眺めているのだが、土曜・日曜などはまだ桜の蒼なども固いの、大分多勢の人たちが通る。ことに女性が多く、老女から小学生まで、年齢差は区々であるが、特に多いのは、子供連れの中年、それも三十歳前後の女性と、二十代の勤め人風女性である。そして、その女人の服装が、実に百人百様・百色であるのだ。それを句にしようと思った。

公園の女人春服個々多彩

と先づ作ったのだが、これだけでは、その公園が、上野だか、日比谷だか、井の頭だか、ハッキリしない。と言って、「公園の」の初五を単に「井の頭」と直しただけでは、井の頭公園を知っている人には判るが、知らない人には判らない。ではどうするか。

私は一応それを「神苑」としてみた。

井の頭は井の頭天神を祀る神苑であり、もと御苑であったものを、恩賜されたものである。

しかし、これは「公園の」よりは幾分具体化せられてはいるものの、私が現に見たところの、池畔風景は、表現せられていない。

何とかそれを表現したいのだが、すでに十七字一杯

で、「池畔」などの三字を入れる余裕はもうない。

それではどうするか。

そこで私は「字余り」句を考えた。

芭蕉にも、その最終吟たる、

旅に病んで夢は枯野を馳け廻る

の字余り句があり、虚子に至っては、有名な、

凡そ天下に去来ほどの小さき墓

の句がある。

この句を字余り句にしたら、どういうことになるか。

それには、二つの形が考えられる。

神苑池畔女人春服個々多彩

女人春服神苑池畔個々多彩

私は結局、その前句に決めることにした。その「個々多彩」は女人の春服なのであるから、両者が離れているよりも、接続して、その主体と態様とが、主語述語的になっている方がよい、と考えたからである。

余白があるので、もう一句示そう。これも茶亭での一句である。

小雨の日だったが、雨の日も行ってみようと出かけたのであるが、春の雨だから細かい。そしてその雨

が、あの井の頭の大きな池の面に、無数の波紋を画き出しているのである。

神苑に無数の波紋春の雨

春雨の無数の波紋神苑池

芭蕉によれば、

「春雨」はを(小止み)やみなく、いつまでもふりつづく様にす

る。三月をいふ。二月すえよりも用る也。正月。二月はじめを「春の雨」となり。
とあり、私は、「春の雨」よりも「春雨」の方がよく、「神苑の」よりも「神苑池」の方が、具体化されたと思ひ、後句の方に決めた。

(55・4・29稿)

◎『浄土』表紙版画販売についての一案内

本年正月号より、版画家の土屋正男先生をお迎えして、『浄土』の表紙をユニークな版画絵によって飾っていただいております。さて、ご承知のように版画そのものは一枚の原版によって、数枚の印刷が可能です。そこで弊会では、土屋先生のご好意に甘えて、興趣溢れる版画絵を豪華額縁に納めて、限定販売いたすことになりました。

領布価格は、額縁代・包装費等をあわせて、二五〇〇〇円です(送料は到着払い)。ご希望の方は、前金にて、当法然上人鑽仰会の左記の住所及び振替欄にお申し込み下さい。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。

(申し込み先) 千102 東京都千代田区飯田橋一―一―六

法然上人鑽仰会 振替(東京) 八―八二―八七



伊豆高原の博物誌

木の 下 隆 一
きの した りゅう いち

(随筆家)

○

「あら、あら、あら……。七百円も生えてるわ」

四月半ばの或る朝、庭に降り立った娘が頓狂な声をあげた。ハハア、紅葉傘を見つけたな、と私はニヤリとした。

四月第一週の土、日曜日に『伊豆高原桜まつり』と銘うった催しがあったが、その客寄せの一つに植木市が開かれた。そこで一鉢百円で破れ傘を売っていたのである。我が家の庭には破れ傘は生えない。毎年破れ傘によく似た紅葉傘が一ヶ所に固まって六、七本芽を出す。

日頃、これらの植物に馴染のない娘が見あやまったとしても無理がない程、両者は芽出しの頃はよく似ている。共にキク科の植物で強いて違いを探せば、破れ傘の方が葉の切れ込みが強く、白い綿毛を葉全体にまといっている。紅葉傘は葉がすぐに開くが、破れ傘は唐傘をすぼめたような姿でなかなか開かない。伊豆高原の雑木林ではどこにもある破れ傘が、一本百円とはやや暴利のような気がしないでもなかった。

「それは紅葉傘で、東北地方ではシドケとかトウキチとか呼んで山菜として珍重するらしい」

両者の違いを説明したついでに私が言う

と、

「トウキチ？」

「木の下に生えるから、キノシタからトウキチロウ、縮めてトウキチとなつたらしい」

「まんざら、うちに関係が無くもないのね」

娘はおかしそうに笑った。去年までは雑草

として芽が出るとすぐ始末していたが、今年は娘の希望もあって、花が咲くまで残しておいてやろうと思っている。

この庭に相応しやせし紅葉傘



朝からしきりに雉子が啼いている。雉子の声はケンケンというのが通説であるが、私にはどうしてもそうは聞えない。ブリキ板をこすり合わせたような音というのが一番近いだろうか。実際に啼いているのを見るまでは、それが雉子の声だとは思わなかった。それを聞いた日、しばらくして震度3程の地震があった。鯨と地震のような関係が雉子にもあるのだろうか、それからは雉子の声を聞くと地震を思ったが、この頃のように始終聞いていると、そんな思いもうすれてしまった。

今年、小鰐が本格的に啼き始めたのは二月九日と旬日記にメモされている。冬の間も

時々間の抜けたように啼いていたが、この日から恋の季節にはいったのだろう、活発に啼き始めた。

この鳥の声を初めて聞いてから、十四、五年になる。夏、西伊豆の岩地へ泳ぎに行った時、朝早く目を覚ますと、既に盛んに啼いていた。朝の早い鳥である。脳天から突き抜けるような、それでいてくぐもったような独特の声で、私には『ペーバーグリーン、ペーバーグリーン』と聞えた。以後、私は小綬鶏を伊豆の鳥だと思っている。

小綬鶏＝鶉鶏目の鳥。チャボほどの大きさで形はウズラに似る。中国南部の原産で、日本各地に野性化。啼声は特異で、カン高い。チョットコイ。

と、『広辞苑』に出ている。『チョットコイ』は啼声の表現である。私には『チョットコイ』よりは『ペーバーグリーン』の方がより適切なような気がするが、大方の書物は『チョットコイ』説である。大正八年、食用とし

て輸入されたのが十羽程逃げて、東京の青山渋谷あたりで繁殖したのが始まりとか。当時の青山あたりには小綬鶏の生息に適する雑木林があったのであろう。

啼声は千差万別で、早口でせっかちに啼くものもあれば、ゆっくり啼くものもある。また吃るのや詛るものもいたりする。テノールもあればバスもいる。音程のいいやつ、悪いやつ。メロディ音痴にテンポ音痴と実にさまざまである。夏の朝、四五羽の子供を連れて一列縦隊でチョコチョコと道を横切ったりしているのは微笑ましい眺めである。

この辺一帯は禁猟区になっているせいか、野鳥は多い。冬の間は山鳥をよく見かけたが、いつの間にかいなくなってしまった。

雉子騒ぐ今日は地震のある如く

小綬鶏の声や寝覚めの煙草喫ふ

それほど広くもない庭なのに、よく観察す

ると、いつの間にかいろいろな植物が育っている。

金蘭と鈴蘭は裏の雑木林で見つけた。どちらも丈が低いから雑草に埋れて余程気をつけていないと見すごしてしまう。同じラン科のエビネもそうである。エビネは去年の正月、年始に行ったお宅のお嬢さんに誘われて採りに行った。エビネが好事家の間で非常なブームになっているとは聞いていたが、枯葉に埋れて地平にへばりついている葉を見て、これがかの有名なエビネかと、私は内心がっかりした。

「以前はこの辺に沢山ありましたのよ。でも業者が小型トラックで来て、ごっそり持って行ってしまっ……」

先住者のお嬢さんは、暗に沢山採るなど言っているようなので、私は五株だけ採取するにとどめた。

後にここには某大学の健康保険組合の寮が建った。私がエビネを採った半年後のことで

ある。

「こんなことなるのなら、あの時もっと採っておけばよかったですね」

後日、お嬢さんに逢った時そう言われたが、その年、五株のうち四株は花を咲かせたから私は満足であった。今年は十四株花茎を立て、そのうち四株が現在花を咲かせている。しかし、ブームを呼ぶ程の花ではないと思ひ、蘭科の花はなにか物悲しい。

金蘭も鈴蘭も花が終ると、いつの間にか姿を消してしまう。栽培の難しいものでなにかで読んでやほりそうかとあきらめていたら、今年十二、三株花を持ちそうに育っている。

天城の七滝から採って来た著我も花をつけた。

天城より移し植えたる著我咲きぬ
こぞり咲く著我は天城の花ならむ

四月半ばから齒の治療のため、半月ほど伊豆高原を留守にして東京暮らしが続いた。城ヶ崎の樹海が新芽を吹いて樺色に霞む頃出て、五月三日、満員電車にもまれて帰って来たら、すっかり青葉になっていた。

一昨年の秋、林の中で蔓に成っている黄色いゴルフボールを一廻り大きくしたような実を採った。瓜の一種には違いないが、なんであるかは判らなかった。丁度隣家に庭師が二人はいっていたので尋ねてみたら、烏瓜とのことであった。烏瓜というのは赤い実のはずだがとただすと、この辺ではこれを烏瓜というのだそうである。

「これは食べられん。アケビかムベがいいんだがね」

「アケビよりムベの方がうまいよ」

若い方の庭師が言った。

「似たようなもんだが、あしたムベ持って来てあげるよ」

年輩の庭師は、翌日本当にムベを持って来

て樺の根元に植えて、

「二、三日、水やってね」

と言って帰って行った。土地の人は親切なのである。去年は花をつけなかったが、今年は青々と伸びているので、そろそろ花を咲かせてくれるだろうと思っている。

ものの芽を育てる雨となりにけり

天城晴れ麓に花の雲引けり

桃の花盛りをすぎし午後空

衰へし目に連翹の黄が眩し

山菜に地酒に春を惜しみけり

○

『伊豆高原の博物誌』などと大袈裟なタイトルで書き始めたが、意のままにならず、甚だ不本意な結果となってしまった。来月号には城ヶ崎の海の美しさを書いてみたいと思う。

曇り日の午後はけだるし八重桜

文 字・言 葉 の 国 <中華>



よし だ こう かく
吉 田 光 覚

(岩手県紫波町極楽寺住職)

日本にもよい言葉がある。大抵は仏教思想に関係した表現ではあるが、「お蔭さま」「有難い」「勿体ない」「御馳走さま」「知恩報恩」など、挙げればきりが無い。

英語だって、それぞれの意味合いがある。ブレックファスト、朝食であるが、ファストとは断食ということ、ブレックはブレーキをかけることで、止めることである。夕飯を済ませてから、朝を迎えるまで長時間の断食を中止して食膳につくから、ブレックファスト＝朝飯となる。サンキューだって、あなたに感謝するから、有難うになるのである。

私は昨年五月二十一日、第二次訪中団に参加させて頂いて、宿願の高祖善導大師のお墓詣りを果たすことができた。十三層の墓塔、玄中寺、香積寺と巡礼できた感激は、九十三名の団員等しき感懐だったと思う。二週間の

旅行中、受けた印象は多々あるが、さすがに文字の国、言葉の国と思つて来た。

所々に毛沢東の語録が見える——「人民只有人民、才是創造世界、歷史的動力」。福沢諭吉の天は人の上に人を造らず、人の下への類か。天安門広場の記念碑には、「人民英雄永垂不朽」の八字が刻まれている。学校を見る。日本の校訓めいた努力目標が掲示してあった。「勤奮学習、遵守紀律、熱愛勞動、助人弁業、難苦奮斗、英雄對敵」と。長年の血と汗からしみ出た教訓と受取る。

「天天向上、好好学习」——中国人はよく天という字を使うようだ。弁公室は事務室、服務台は係員のいる所らしい。

「文物古跡、是歷代勞動人民智慧の結晶」——正にその通りである。晋陽第一泉はこんこんと綺麗な泉が流れて灌漑、工業、引用水に利用されている。そこに「昼夜不舎、天地同流」とあった。水淨清施の語もどこかで見た。

玉仏寺こと旧名白馬寺のお賽銭箱には、上に「功德箱」、下に「広種福田」と記されていた。同じ賽銭箱とメモにあるが、香炉の誤りかも知れず、それには「敬香

大吉」とあった。淨財とか喜捨と同様に、正に仏教用語である。

二人の法師にサインを頼むと、「法輪常転、仏光普照」と即座に書いて下さった。中国国際旅行社の西安分員は「実事求是」、飛行機に乗合せた二人は、「中日友好万歳、同机上海旅行」と記して署名してくれた。私共も名前だけのサインでなく、突嗟に一行記せるよう心掛けたいものである。日本の棟札様のものだが、次は右に刻んであったと思う。

仏法長春舍利法会之札右

右 中国仏教協会奉迎仏身

左 越南南方仏教徒代表団敬贈

謹捨淨財敬造此經一卷 大定七年十月五日

施主求賢村 善青弟 单児



この機に中国語をちょっと調べて見た。主な単語を次に挙げてみよう。

今天（今日） 昨天（昨日） 明天（明日） 春天（春） 老師（先生） 老朋友（旧友） 小朋友（友達） 再見（さよなら） 飯店（ホテル） 有空（ひま） 香煙（たばこ） 没有（無い） 滑雪（スキー） 熱情（親切） 服務（奉仕） 知道（わかる） 郵筒（ポスト） 信封（封筒） 名片（名刺） 筆記本（手帳） 收音机（ラジオ）

極端に違うことば――、

手紙（トイレットペーパー） 火車（汽車） 汽車（自動車） 娘（お母さん） 猪（ブタ） 煤（石炭） 勉強（無理をする） 愛人（夫又は妻） 大夫（医者） 年経人（青年） 同好（よろしく） 是（です） 熊猫（パンダ） 和（接統詞のと）

読みは違うが、さすがに同字同義のものが沢山ある。
次は、ほんの一部に過ぎない。

国家、唱歌、参加、精神、自力更生、建設、自己、提出、学生、大中小、教員、住宅、会堂、倶楽部、托児所、児童、風景、意見、果樹、生活、蔬菜、年月

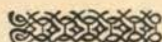
日、成立、座談会、家庭、緩和、桜花、季節、愉快、健康、文学作品、尊敬、希望、歴史、英雄、回顧、革命、現在、非常、幸福、著作、改造、世界観、努力、研究、小説、完、地方、大概、内容、変化……



詩文については私など論ずる資格はないが、年毎に訪中団が増加する昨今、私共は訪中前にいくらかでも予備知識があれば、非常に役立つことが多い。従って、つとめて中国語の学習に心掛けることが肝要に思う。発音は会得せずとも、文字の上だけでも一応の理解を持つことをお奨めして、報告にも替え一文を草した次第である。

最後に中国のモットーである「農業は大業に学び、工業は大業に学ぶ」に、私達、浄土宗の力で、将来「宗教は西安（終南山）に学ぶ」と加える日が到来するよう期待したい。

浄土句集



東京 鈴木 葉子
銀座裏こんなところにも大ふぐり

評 銀座裏にふぐりとは、全く意外なようであるが、大ふぐりの性の強さをよく表現している。

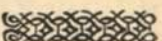
東京 細田 初枝
連翹れんぎょうの黄のみ残して園昏るる

評 薄暗くなった園に昏れ残っている連翹の黄をよく捉えている。

福岡 原 敬二郎
石階を登れば花の知恩院

評 知恩院への参詣は、女人坂を登れば来たが、三門よりまっ直ぐ登る石階は、そ

一田牛畝選



福岡 荒牧 還愚
家族皆移り変りに春の風邪

福岡 高良 慈風
天平の大和路めぐり寺うらら

福岡 高良 幸代
春暁の大念仏や知恩院

山形 松田 允子
卒業子見送る教師寡黙なり

山形 松田 光誉
紺移る空に分校の卒業歌

東京 栗原やえ子
国の春裕宮様加冠の儀

東京 吉原登起子
水温む京葉洗ひに腕まくり

東京 末常てる子
古雛の裾せ給ひしにこやかに

三門に篝火映えて薪能

東京 吉田ゆき奈

評 増上寺の薪能であらう。高々と聳ゆる三門に篝火が映えている景は雄大でそこそかで、殊に土蜘蛛の糸が美しかりし。

東京 新井 新生
長が生きて逢ひし善導大遠忌

評 善導大師の遠忌は五十年毎であるから前の遠忌が三十歳であった人は八十歳まで。長生して大遠忌に遭った喜び。

東京 真野 竜
春一番傘傾けて歩道橋

東京 小笠原香祥
梅見よと知らせ嬉しき里便い

東京 松溝 敏江
姑ははまして雛ひなの灯ともし美しく

東京 阪入 等達
顔かほせに心地よき風日脚伸ぶ

東京 阪入志津枝
星薄れ朝の厨の訝え返る

山口 三井 寛静
春雨に納骨の朝冷ゆるとも

群馬 島津 か寿
白梅のおおき迄澄み空晴るる

三重 山田 うた
夫つまの忌や歴代の墓花吹雪

埼玉 佐久間愛子
鹿鳴館趾といふとこ春霞

三重 森 静枝
ものを干すその一陽の露の墓はか

福岡 三牧 重利
ぼんぼりに散る花びらや宴はずむ

山梨 青山富貴江
花莚明治は遠く軍歌かな

福岡 稲永 新
住む人の絶えし屋敷の沈丁花

東京 田中 秀代
職人の手元確かや雛作

大分 丹羽 難中
祖師の芳心に導師善導忌

福岡 上滝津弥音
そこまでと言ひ臘夜に別れけり

東京 猪瀬 幸子
老兄の話穂やか蟻の道

京都 安藤 寛
石地藏雪の上より水供養

福岡 服部 光代
向ひ合ひ本家分家や辛夷咲く

東京 星野 小登
又一人友の計を聞く落葉かな

福岡 永江 隆説
採水の錦江今は異国なり

東京 真野よし子
独居ひとりどまりの部屋の水仙匂ふのみ

東京 大野いく子
漁火を酒の肴に伊豆の春

一田 牛畝
大機おほはたとり本山の安居の間

表紙のことば

「寂 浄 光」

土屋 正 男

けろッけろッけろッ。蛙の合唱は夜の水面
いちめんに広がって賑やかである。蛙が合唱
しているようでもあるがビヤホールのざわめ
きにも似ている。けろッけろッけろッ。いま
己れ達が住んでいる水の中の安泰を、幸福に
酔って蛙達が騒いでいるみたいで聞いている
楽しくまた面白い。

ほんのわずかな微風が水の上をそよぐと今
のいままで鳴いていた百千の蛙共が一斉にビ
タリと鳴き止んだ。

すべての音を絶ったこの静寂の世界。深い

水底に沈んでいくかと錯覚する長いような沈
黙のひととき。月光は水蒸気を含んで乳白色
にかがやいている。寂浄光。

やがてその沈黙の息苦しさに耐えかねたよ
うに一匹が鳴き出すと誘われるように百千の
蛙が和すようにけろけろと鳴き出した。

この小さい蛙の楽園もいつまで続けて行け
ることだろうか。農薬に汚され、ブルトーザ
ーで壊されるまで、せめてその時の来るまで
は、蛙よ楽しい時間を過せ。

①句②会③た④よ⑤り

善導大師遠忌吟行の記

しお　やま　さん　きゆう
塩　山　三　九

(俳人協会会員)

浄土宗の高祖として宗祖法然上人の尊崇措く能わざる善導大師の千三百年の遠忌が、総本山知恩院で厳修されるというのでわれらが東京・芝公園天光院も奉賛会を結成して準備怠りはなかったが、愈々機が熟し住職真野竜海師(俳号、竜)をはじめ檀家有志が会を代表して団参を決行することになった。

三月十九日定刻八時、富士観光の大型バスで東京駅前出発。近県からバス電車と乗り継いで来られる人も多いので、近頃はやりの海苔巻のおにぎりが朝食として一同に配られる。幼稚園の卒業式をすませて来られる竜海師と所用で遅れる清水副会長夫妻を除いて合計十四名(内俳句会のメンバー十名)がゆったりと席を占める。

空はどんよりと曇って午後の天気は気使われたが、御

殿場にさしかかった頃には雲が破れて富士が麗容を大きく右窓に現わした。由比のあたりでは波静かな駿河湾が左窓に展げ、真紅の桜海老が春光の下、海沿いの道に干されていた。

桜海老些か干された由比の春

真野よし子

静岡を過ぎて緑の茶畑の中の小高い牧の原に着いたのは十時、ここで小憩、甘いものに目のない新井会長の肝入りで名産阿部川餅が配給され一同思いがけぬ珍味に舌鼓を打った。浜名湖は雲一つない快晴、然し今までノンストップで快調に走り続けていたバスが急に止まった。長い車の列、すわ事故かと心配したが湖の絶景を賞でて

いるうちに動き出した。

浜名湖にうすくひろがる春の雲

栗原やえ子

雲晴れて湖水俄かに春めきぬ

吉原登起子

長き橋美しき橋春の湖

田中 秀代

麗かやS字に渡す湖の橋

塩山 三九

豊川の山サという蒲鉾屋経営するところのレストランで昼食、満腹と今朝の早起きで一同うとうとする間に関ヶ原の古戦場を通過、山巒に雪残る伊吹の峻嶺が車窓に迫る。

春雪の伊吹大なる画帖かな

阪入志津枝

琵琶湖はちらつと見ただけ、比良八荒の話など聞いている間に逢坂の関を過ぎ、トンネルを通れば早京都である。まだ日の高い午後四時であった。

春霞京は墨絵の如くあり

小笠原香祥

名利智積院に入り構内の鉄筋三階建ての会館の二階の四室に分宿する、拡声器で食事の用意が告げられ一階の食堂にずらりと二列に食卓に就く。当番僧の発声により箸袋の裏の食前の五則を高らかに述べ、京都まで途中を無事に到着したことを仏に感謝する盃をあげた。食後、女性軍は盛り場へ京土産を漁りに出かけて行った。この会館の前は東山通とて夜つびて車の交通が絶えず、おまけに明日は彼岸の休みとて暴走族が排気音物凄く折々安眠を妨げられた。

更くる夜の我待つ宿の春炬燵

真野 竜

一泊の旅の京都の大石忌

真野よし子

明くればお彼岸の中日、六時にマイクで起床と放送される。蒲団、寝具を片付け急ぎ洗面、金堂の朝のお勤めに列席する。金堂は最近の建築で、仏様から天蓋までキンキラキンで風情がないこと夥しい。七時に不動堂へ移る。お護摩の火があかあかと燃え熾り、衆僧の誦經と法鼓の音騒然たる感があつたが、ここは昔乍らの御堂で護摩の煙に燻んで、古色豊かで詩情自ら沸くのを覚えた。

春寒の護摩火のはてる不動堂

真野 竜

終つて本堂の拝観、門を入ったところに虚子先生の「ひらひらとつくもをぬひて落花かな」の名句を彫った句碑が立っている。

虚子句碑の文字をなぞりて春彼岸

塩山 三九

朝食を終つて程近い三十三間堂に参拝。昔来たことはあるが久し振りに記憶を新たにすることができた。

ここから今回の旅の目的地知恩院へは東山通を北上すれば十分もかかるまいと考えていたのに、大型車の規制で七条通を西進し、堀川通を北上し、御所の北側を走ることになり、準備万端整えて待つていた案内僧に迷惑をかけたのは相済みぬことであつた。

遅れ馳せ乍ら大殿（須弥殿ともいう）の大法要に参列、遙か千三百年の昔遷化された高祖善導大師を偲ぶことができた。鶴の襖絵があることで鶴の間と名付けられたお部屋で、大遠忌担当の役僧のご挨拶と茶菓を頂戴した。

御忌の鐘空にひろがり僧の行く

真野 竜

わが齡楷定念仏春彼岸

阪入 等達

嬉しさは句友と共に善導忌

田中 秀代

有難や善導遠忌にめぐり合ひ

真野よし子

香煙や善導大師忌を修す

同

豊かなる心の糧や善導忌

小笠原香祥

生享けて生きる喜び善導忌

吉原登起子

磬の音冴え衆僧の経進む

真野 竜

遠忌修す春の彼岸の知恩院

塩山 三九

境内徳川三代廟の上に位置する墓域内に天光院檀家の氏名を彫り込んだ天光院供養塔に竜海師を導師として参拝。これを以て今回の知恩院での行事を滞りなく終り一同安堵。

供養塔春光の下安らかに

真野よし子

昼食は円山公園内の料亭篝火。入口にはその名の篝火が一对あかあかと燃えており、緋毛氈を敷いた床几がおかれ私達を迎えてくれた。南縁に面した奥座敷には

名物の大きな湯豆腐の土鍋が三つと、銘々に田楽を細い竹串に挿した皿を中心に料理が並べられ、前庭にはここにも緋毛氈が燦々と真昼の日射しに照り映えていた。

「篝火」の湯豆腐の味春うらら

栗原八重子

春うらら田楽の味緋毛氈

同

この度の旅の主目的の行事が終わったことを祝う乾盃に、心ゆくまで京の春を楽しんだ。

知恩院で待機しているバスを待つべく一同はお彼岸で雑踏する円山公園を抜けて東山通に出る。向う側の都踊の祇園会館の前には前売切符を買う人の待合せ用の緋毛氈が見える。

緋毛氈都踊の前景気

塩山 三九

バスは東名高速を立栗まで東進し、ここから石部、水口、土山と旧東海道を鈴鹿の嶮にかかると、右に左にバスは大きく揺れて曲りくねって行く。山深く昔の旅は大変だったと話している間に石油コンビナートの四日市だ。

鈴鹿越ゆバスの内外うららかや

阪入志津枝

ここから名鉄の支線沿いに鈴鹿の主峯、御在所岳の麓の温泉境湯の山に入る。

湯の山の涙橋とや水温む

田中 秀代

温泉街は巨岩磊々の溪流に沿って建てられており、急坂で曲りくねっているので路線バスの終点でホテルからのマイクロバスに乗り換え、まだ日の高い午後五時湯の山ホテル安着。

善導忌修せし安堵湯の山に

塩山 三九

部屋付の浴槽もあるが男性軍はそれとばかりに大風呂に下りる。お湯は無色透明で滾々と浴槽から溢れている。熱海のようにみみっちいものではない。前庭には梅が盛りで川を隔てて前山が眼前に迫る絶景である。

バスの中で配られた短冊に句を記して夕食の会場の大広間で投句する。殆んどの人が十句以上という誠に頼母

しい限りである。コの字型に並べられたお膳に向えば正面の舞台に「天光院御一行様歓迎」の横書の板が垂れている。この板をするすると頭の上までおろして一同舞台に並んで記念撮影。女中さん方の湯の山音頭を皮切りに、竜海師の名調カラオケ、さては長いこと月謝を払われた旦那方の渋い咽喉が披露されて漸く宴酣の午後八時、第一部の終りが宣せられ金屏で仕切られたお隣りで俳句会となる。先刻投句すみの短冊を清記、遅句、披露とスムーズに進行、午後十時お開きとなった。

山の湯の誰憚らぬ大朝寝

塩山 三九

ここ湯の山温泉は急坂に沿って旅館が建ち並んでいるので散歩する場所もなく、名勝御在所岳も日本一の長さを誇るロープウェイで片道十八分とあつては次の機会に譲らざるを得ず、充分に朝寝を楽んで二十一日朝九時出発。四日市、小牧から中央高速に入り須藤さんの案内で多治見の名刹虎渓山永保寺に立ち寄る。お寺への下り口でバスを降り急傾斜の坂にかかると参道の左側に西国三十三ヶ所の観音様が番号順に並んでいる。下り切った盆

地に心字池が拡がり檜皮葺の屋根付の渡殿が対岸の開山堂につながっている。昔年らの大寺の風格のがらんとした庫裡の玄関に刺を通ずると、青年僧が現われて、住職は留守なのでどうぞどこでもご遠慮なくご覧下さい、とのこと。

虎渓山心字池ぬるみ五平餅

栗原やえ子

春水に一塔映す永保寺

真野 竜

この寺は土地の豪族土岐氏ゆかりと見えて昔からの古い位牌が持仏堂に飾られていた。

春陰や桶の馬据え持仏堂

塩山 三九

予定時間が遅れたので会長より急ぎ出発の号令がかかり、五平餅の配給に腹の虫をだまして出発、程近い美濃焼ランドで昼食。

春の旅陶土の街の小休止

真野 竜

この店は売店だけで、窯や実演などがなかったので俳句党はがっかり、せめて一献に疲れをいやして出発。東名を東進、浜名湖で小憩、この度はじめて参加の須藤さんが次の名句をものされた。ベテランもたじたじ。

春の日に映えて彼岸の遠江

須藤 政雄

浜名湖はとろりと淀み島霞む

小笠原香祥

浜名湖の縮緬波に春の風

真野 竜

足柄にかかったのは夕闇迫る午後六時、お宅に待つ家族や親しい人達へのお土産を買い足してあとは暗闇の中をひた走って無事東京駅前に安着。解散したのは七時二十分であった。

思うに今回のこの壮挙が滞りなく進められ全員何の故障もなく帰京できたことは、一に高祖善導大師、宗祖法然上人のご庇護と、竜海師のご幹旋、会長始め役員の方々の周到な企画、指導によることと会員一同の一致協力の賜もので、誰かの句にあったようにお互いの理解を深め、今まで以上に親しさを増すことができたのはご同慶の至りである。

村瀬 秀雄 著

|| 新刊 ||

『和 訳 善導 六時礼讃』

B 6 判 二六五頁 価二四〇〇円

|| 好評 ||

『和 訳 善導 観経四帖疏』

B 6 判 五八四頁 価三五〇〇円

『和 訳 法然 上人 選 択 集』

B 6 判 三八七頁 価二五〇〇円

『和 訳 浄土三部経』

B 6 判 四七四頁 価二五〇〇円

取扱い 法然上人鑽仰会



念佛ひじり三国志

(主四)

―法然をめぐる人々―

寺内大吉

挿絵 松濤達文画

一

法然及び在京の念佛ひじりたちにとって運命の時間となる建永元年(一二〇六)が、刻々と極月へ迫りつつあった。この複雑怪奇な時間帯を書き割りした作者は後鳥羽院であるが、この人の権力エネルギーを探ぐるための資料は余りにも乏しい。わずかにわれわれは藤原定家が書きのこした日記「明月記」を軸として推量するしか方法がない。

ところでこの時期における後鳥羽院と定家との関係だ

が、互いに何処となくうとましくなってきた。勿論そのうとましさは両者の間で「質的」に甚だ異なる。

後鳥羽院にとって定家は歌道における先達である。あの時期には彼の技法を吸収し尽そうとして、のめりこまなばかりだった。それが、すでに技法の上で学ぶところがないと独断するや、同時に定家を頂点とした御子左家という伝統芸道、家元直流の「歌道的な余りにも歌道的な」ありかたに不満をおぼえた。志操志気を歌道に託そうと目ざめはじめた後鳥羽院は、これまで定家にそそいでいた熱い視線を他へそらしたのだった。

定家も、院のこの異心邪節を敏感に嗅ぎ取った。直接

のきっかけは「新古今和歌集」の選者にまつわるトラブルだった。ほぼ二千首が定家たちによって選歌されたのだが、後鳥羽院はさらにこれを分類別に編集し直そうとする。それを理由に二人の選者を新たに増員した。源具親と藤原秀能である。前者はともかく秀能は西面ノ武士の統領で後鳥羽院直属の秘密警察の長官とも言うべき人物だ。

秀能が、九条兼実の息子良経横死に強くかかわっていたらしい事実、また法然諸伝が説く安楽、住蓮を処刑した「官人・秀能」で、承久ノ変の首謀者だったことは、すでに書いた。

定家はそんな人物の混入に嫌気がさし、日記で「近日和歌ノ部類、日毎ニ催スト雖モ所勞スベ無キ由、披露ス。万事ニ興無シ。交衆甚ダ無益ナリ。道心無キヲ以テ、ナマジイニ旬月ヲ送ル。只、恥辱ヲ増スアルカ」と吐露している。秀能らとの「交衆」がきわめて無益だという。

さらに昨元久二年三月二十六日、和歌所の総会とも言ふべき「寛宴」がひらかれたが、定家は欠席し、法性寺殿で聖覚法印の説法を聞いているのである。

後の話になるが、承久ノ変勃発の前夜、内裏でひらか

前号のあらすじ

法然上人の専修念仏の教団は、北条執権勢力下の鎌倉幕府方と、後鳥羽院政に代表される京都朝廷方が政権争いに揺れ動いていた時代、着々とその信仰勢力を伸ばして行った。法然上人滅後、浄土宗の血脈は鎮西上人聖光房弁長によって九州地方に主として伝播したが、もとより京洛や鎌倉においても、専修教団は目ざましい発展を遂げていた。ただ法然上人が鎮西上人に托した、唐善導大師への想いは、なにもによっても動かしがたく、そこに二祖弁長の二祖たるの重い責任があったのだろう。そして今、この二祖のもとへ参じた三祖良忠への法脈の伝承も、やはりそれなりの因縁があったようだ。夢告によって、石見国多陀寺に山籠っていた良忠を訪れた盲目の法師生仏の訪問も、実は「濁世の富楼那」こと、聖覚法印の義弟にもあたると類推される記主禪師良忠その人の立場を考えないわけにはいくまい。

れた歌合わせを定家は忌避した。理由は亡母の祥月命日だったからである。しかに後鳥羽院は強引に三度も使者を定家邸へ派して出席を強要する。

定家はその歌合わせで、

道のべの野原のやなぎ下萌えぬ
あはれ嘆きのけぶりくらべに

と憤りと不満を歌に詠んだ。

後鳥羽院は怒って定家を勅勘し閉門を命じている。

この建永の時期、勅勘などという決裂状態ではなかったにしても、後鳥羽院と定家がお互いに異和感をいだきはじめていたことは間違いない。

ただ後鳥羽院の受け止め方は、鎌倉幕府へ向けた自分の積極政策、その倒幕姿勢を危惧する公卿貴族たちの一員として定家をとらえる程度だったであらう。

定家の方は、院を歌の世界だけで批判しようとする。

政治という不純分子を混入させはじめたことが許しがたいのである。

しかし、定家は在野の芸術家ではなかった。宮位給俸を得ている宮廷詩人である。御子左家という伝統家元の重荷までも背負っている。みだりに主上を批判したり、反逆することは許されない。すべての不満が内攻し、行動半怪は縮され、日記の記述にも「おさえた」跡が歴然である。

建永元年の十一月二十二日、定家は「大臣殿、来タル二十七日、御出一定ト云々」と、妻の父親である前ノ内

大臣実宗の出家を知る。さらに二十五日には「明後日、御遁世必定ト云々。ソノ以前ニ見参スルタメナリ」と記し、二十七日の記述では「後ニ聞ク。大臣殿己ニ遂ゲシメ給フ。法然房戒師。法印剃リ奉ル。実信、被物ヲ取ル。盛親、布施ヲ取ル(通)納言、野剣・衣帽・直衣ヲ取ラル。髪ヲ剃ルノ後、染衣ヲ著シテ受戒シ給フト」と大宮内府の出家を明らかにしている。

剃度した法印とは実宗の弟仁和寺の阿闍梨公性か、と推考される。盛親は、建暦二年(一二二二)法然の入滅時、その初七日に実宗が諷誦文を献ずるが、末尾にある「別当前周防守源臣盛親敬白」とある盛親と同一人物であらうか。

大宮内府という重臣の実宗が在野の念仏ひじり、それも門弟を通じて鎌倉武士に多くの信徒を持つ法然を戒師として出家を遂げた。この事実が後鳥羽院自身をどれだけ刺戟したかは疑問であるが、その近臣に波紋を投じたであらうことは充分に想像できる。近臣とは、倒幕のために組織された秘密警察である西面ノ武士たちを指している。中心は二位法印尊重や秀康、秀能の兄弟らである。

「明月記」は十二月三日、書いている。「前太政大臣

＜鹿狩りを楽しむ後鳥羽院＞



兵仗ヲ賜ハル事。先例ヲ外記ニ問ハルト、小除目アルベシト。

前太政大臣とは後鳥羽院政の黒幕とうたわれた女傑卿二位兼子の晩飾の夫頼実である。相当なおボチユニストで、後鳥羽院のご機嫌を取り結ぶためなら水火をも辞さない人である。

尚武の氣風を受する後鳥羽院は、しばしば夜を徹して山崎天王山の山中で鹿の狩猟を楽しんだ。この建永元年の六月二日と九日も出猟している。

「明月記」の六月九日は、

今日マタ鹿ヲ追イ出サルベシ。相国、折帽子。早ク駆ケ出サル（今年五十二歳）終日遊獵ノ興ト云々。鹿七、取ラルルノ由ヲ聞ク。故殿仰セテ云フ。延喜ノ聖代、光大臣七十有余ノ齡ニテ狩獵ヲ好ム。馬ニ馳セテ深泥ニ落チ入ル。遂に掘ルヲ得ズシテ、薨逝ト云々。今日見物セズ。生涯何ヲカ為サンヤ。堯舜、周礼ト今イズコニ在リヤ

定家は慨嘆するが、相国とは太政大臣頼実のことで、

五十二にもなつて狩獵に駆けめぐる哀れさ。それを強
い、そこまでやらなければ忠臣とは思わない後鳥羽院の
愚かしさを批判している。光大臣の逸事を語った「故
殿」とは父の俊成であらう。

兵仗を賜う。兵馬の隨身である。この時点で、なぜに
頼実ほどの高官に「兵仗」を賜わたたのであろうか。外
記は小除目のためだろう、と軽く扱っている。

その小除目らしきものが翌四日の記述にある。

乗燭以後、院ニ参ズ。明日、御精進屋ニ御幸ナリ。

今夜、俄ニ侍従実俊ヲ停メ、少将信能ヲ召シ具セ
ラル。日来、箒ニ依リ人数ニ入ル。信能、箒ヲ彈
ズルノ由、思シ食シ忘ル。今夜忽チ召シ替エラル。
又、下北面信久、信実止メラル。御氣色不快云々



あわてふためく院の様子が覗きこめるようである。し
かも後鳥羽院は何かに激怒している。

俄に侍従の実俊が出仕の停止を命ぜられた。まさしく

俄にであつて、少将信能をこれと交替させたが、信能は
日ごろ箒をひいて侍従の一員なのである。それを忘れ
て、二重任命とは、と定家は言外で後鳥羽院の激昂ぶり
を皮肉っている。氣色不快云々……の描写も生きてく
る。

ちなみに侍従職を罷面された実俊は、つい週日前に出
家した大宮内府実宗の子息である。信久、信実がどんな
職責にあった北面ノ武士たちであつたかは不明だが、た
だならぬ氣配が院に立ちこめている匂いだけは感ぜられ
る。

後鳥羽院があわてる理由はわかる。明日から「御精進
屋ニ御幸」と、つまり熊野参詣への出発が迫っていたか
らである。

当時、聖護院の一隅に熊野神宮の精進屋——御潔所が
あつた。ここで四日間、斎戒沐浴して熊野へ出発するの
が慣例だ。

後鳥羽院は都を留守にする。出発前に万全の手を打っ
ておく。

その万全の手が、無二の忠臣（？）頼実に兵仗を賜い軍
司令官とした。侍従の首を俄に切り、北面ノ武士二人も

罷面だ。いったいどんな異変を予測し、何事に備えようというのであろうか。

周囲に理由は絶無である。鎌倉方面からの動きも全くない。

さらに物々しさは、聖護院の精進屋で四日間の齋戒沐浴を済ませた後鳥羽院の熊野出発である。わずらわしいだろうが、だいたい「物証」なのでまたしても定家の「明月記」(十二月九日)を引用する。

鶏鳴ノ後、御精進屋ニ参ズ。門前ニ人々多ク列居ス。ヤヤ久シクシテ女房立タレオワンヌ(三品)。
次デ御先達参ズ。次デ越中ノ内侍、見物ニ出ズ。
女房ノ出車、朱雀(重)八条坊門ノ辺リニ立ツ。次
デ御候具シ出ズ。前太政大臣出デラル(杖ヲ突ク)。
次デ御先達出ズ(寛実僧正)。次デ布衣ノ殿上人、
御隨身、松明ヲ取ル。次デ出デオハシマス。次デ
浄衣ノ公卿、次デ布衣ノ公卿、上北面。朱雀ヲ南
行ス。造り路ニ於テ天曙、松明ヲ棄ツ。鳥羽ノ南
門五町許リヲ出デテ、御舟ニオハシマス。御舟寄
セニ轆アリ(但シ小舟ナリ。屋形ナシ)。布衣ノ人々

列居ス。御舟出デオハリテ各々帰ル

熊野行幸の出発、その先頭に立つ「女房立タレオワンヌ(三品)」とは誰あろう。後鳥羽院政の黒幕、卿二位兼子である。「京ニハ卿二位ヒシト世ヲ取リタリ。女人入眼ノ日本国イヨイマコトナリケリト云フベキニヤ」と慈円が「愚管抄」で痛評を加えた乳母上がりの女性である。晩飾の夫で兵仗を賜ったばかりの頼実も見送りに来ている。兼子は後鳥羽院に同行して熊野まで出かけたのであろうか。

隊伍は威風堂々、朱雀大路を南行する。造り道とは唐で言う「沙堤」であらうか。大路の中央部分に白砂をまいて、貴人が歩むのである。

いつものコースをたどり鳥羽の船寄せ場へ来る。ここ定家は「おや」と首をかしげる。日記のカッコ内の記述だ。

後鳥羽院の乗船が余りにも小ぶりだった。屋形もない。定家自身が熊野へ随行した折の乗船を思いうかべたのであろう。

それでも浄衣を着こんだ随行者たちを乗せ、卿二位兼

子もだが、船は南へと淀川を下ってゆく。

天満の港で船を捨てて、あとは陸行だ。泉州路から紀州へ各王子社を経て進む。田辺からは峻嶮を縫う中辺路へはいって熊野本宮へ至るのである。

この建永元年十二月の熊野行幸。後鳥羽院はほんとうに熊野まで足をのばしたのであろうか。その留守に世にいう「鈴虫松虫事件」が惹起するわけだが、いささか疑問なしとしない。

定家が投げかけた出発時における乗船の小ぶりさ。それと帰洛のあわたしきぐらいで、ほかに疑念をさしはさむ理由は見あたらない。

帰洛だが、「明月記」は淡々と書く。

院ニ参ズ。殿上人小々参候ス。但シ還御ダニ及ブベシト云々。今日既戸ヨリ入りオハシマス。日入ルニ及ビテ大宮中納言、六角納言(親経)侍従宰相参入。格子ヲ下グルノ程ニ入りテオハシマス。未ダ松明ヲ取ラズ

何やら後鳥羽院は、こっそりと帰洛している。そのこ

っそりぶりを、定家は巧みな筆で描写するのだ。

殿上人小々参候ス……既戸ヨリ入りオハシマス……格子ヲ下グルノ程ニ入りテオハシマス……居候が朝帰りでもしたような風情ではないか。出発の物々しさとは余りにもかけ離れている。

後鳥羽院の留守中、定家がこんどの熊野行幸を疑っているのを匂わせる文章もある。十二月十五日に「天晴レ、雪飛ブ。院に参ズ。留守殊ニ沙汰アル由、人々称ス」と書く。

人々称ス、と責任逃がれはしているものの、殊ニ沙汰アル由、とはどういう意味であろうか。文意そのままなら「重大発表」があるだろう。いったい何を発表しようとするのか。

熊野往復に費した十八日間の行程——三十一回に及んだ後鳥羽院の熊野参詣では最も短期だが、極端と言うほどでもない。途中、各王子社での「遊び」さえなければ充分に消化し得るスケジュールである。ただし厳寒の十二月や卿二位兼子という女性を同道した場合は、どうであらうか。

もちろん立派なアリバイを後鳥羽院は熊野本宮に残し

てきている。

契りあれば嬉しきかかる折りにあひぬ
忘るな神も行末の空

後鳥羽院らしい豪放な歌境だ。しかも前書きには「熊野の本宮焼けて、年のうちに遷宮侍りしにまいりて」と添えてある。アリバイは完璧である。

この年三月に焼失した熊野本宮。後鳥羽院は五月にも一度出かけているのだが、復興成つての遷座祭に臨んだのであろう。

こう見てくると疑念は一つづつ解明されてゆく感じである。アリバイ証固もひととおりそろっている。いや、そろい過ぎるほどである。ひっかかるとすれば、その「そろい過ぎ」であろう。権力政治が策謀をめぐるすとき、往々にして仕組む手口だった、と言えなくもない。ここでわれわれは、この物語にしばしば登場してくる明遍僧都が体験した「平治ノ乱」を想起しないわけにはいかない。

平清盛は、重盛ら一族郎党を引きつれて熊野参詣へ出

発した。六波羅の邸は無人になった。

かねて平氏を追放して廟堂における権力を掌中に握ろうと企図していた藤原信頼は、源家義朝を誘って挙兵した。まさに絶好機と判断したのである。

だが、その絶好機こそ平清盛が仕組んだ罠だった。遠く熊野への旅にあったはずの清盛が、考えられぬスピードで京へ馳せ戻ってきた。考えられぬスピード、そこに歴史の秘密を解く鍵がある。反乱騒起を充分に予測し計算して舞い戻ったのである。当然、在京中の後白河上皇もこの罠を承知していたことであらう。

信頼や義朝を滅ぼす罠に、平清盛は長年にわたる政治上の同志だった明遍の父信西入道も同時にハメこんでいる。だからこそ罠の深さに政敵信頼たちは気づかなかった、とも言える。清盛の熊野参詣が、偽装陽動であったなら、信西入道にも何らかの手を打ってゆくはずだ。それが彼はほんとは洛中にいる。額面どおりの参詣であらう、と疑心暗鬼を解く。

清盛にとって信西入道は長年にわたる同志とは言え、平氏一門の独裁政治を構想したとき、彼の存在は邪魔になる。その才智は後白河上皇をそそのかして何をやらか

すやもはかり知れない。

とあれば、謀叛人の信頼や義朝の手で信西入道を滅し
てもらえれば、これほど有難い話はない。文字通りの一
石二鳥である。そして平氏一門はまんまとこの罠を成功
させたのである。

さて、建永元年十二月の熊野参詣だが、もちろんその
スケールは「平治ノ乱」に比すべくもない。罠におとし
入れた獲物にしても高々が念仏ひじりたちではないか。

後鳥羽院にしてみれば、日常に好んだ鹿狩りや盗賊捕
縛の遊び程度であつただろう。

物的証固を何一つ残さなかったこの宗教者弾圧。後世
のわれわれはわずかに藤原定家の日記から策謀の陰湿さ
と残酷さをしのぶだけである。

「明月記」は年が明けた正月二十四日と二月九日の記述
ではめかしている。

正月二十四日

専修念仏ノ輩、停止ノ事。重ネテ宣下スベシト云
々。去ルコロ、イササカ事故アリト云々(其ノ事、
已ニ輕カラズ。又子細ヲ知ラズ。筆ヲ染ムルニ及バズ)

二月九日

近日、只一向専修ノ沙汰。搦メ取ラレ拷問サルト
云々。筆端ノ及ブ所ニアラズ

三

話を戻す。

後鳥羽院が熊野へ出発する直前の十二月四日、小除目
がおこなわれたことは、すでに書いた。大宮内府実宗の
子実俊が侍従職を追われ、少将信能が任命された。

すでに侍従だった信能を「重複人事」か、と定家は皮
肉るが、この皮肉、激昂した後鳥羽院のあわてぶりを笑
っただけではあるまい。定家の筆は、後鳥羽院が熊野へ
去ったあと、留守の実権を握る人物を指さそうとしてい
るにも受け取れる。

その実力者とは、少将信能ではない。彼の実弟で鎌倉
幕府追討の闘志を燃やし続けている後の二位ノ法印、尊
長である。尊長は、承久ノ変において、「官人・秀能」
兄弟ともどもにその首謀者とうたわれた人物だった。

尊長は翌年に露顯する（あるいは捏造された）念仏ひじりたちの風紀問題、その処刑の直接責任者でもあったが、このころを契機として宮廷内で大宮内府実宗直系の西園寺一族に、たえず糾弾の刃をすぎますのである。

大宮内府実宗の長子公経は、名門の嗣子にもかかわらず、出世の速度は遅々としており、何度か「勘氣」をこらむって蟄居を命ぜられていた。被害の最大のものは、承久二年に捕縛され、内裏の弓場殿に拘禁された事件であらう。二位ノ法印尊長の策動による。

尊長は、公経が鎌倉北条に氣脈を通じ、宮廷の重要な決議を通報するスパイだ、ときめつけた。これの処刑を院へ願ひ出ている。

公経の首を危ういところでつないだのは、徳大寺公継だった。徳大寺は当時、右大将の任にあつて後鳥羽院への建言にも重味があつたらしい。

この徳大寺公継は法然に帰依した門弟の一人だつたと言われる。元久二年（一二〇五）興福寺の衆徒が専修念仏を糾弾する「白疏」を捧じた折、法然及びその弟子、権大納言公経を指名で捕縛を要請しているほどだ。

また西園寺公経は、父の実宗が法然を戒師として出家

した事実は前述のとおりで、彼自身も篤信な念仏者で聖覚法印を戒師に入道となつてゐる。

承久二年の危急時における両者のつながりは、同じ念仏門の仲間という意識が働いていたのかも知れない。

彼らの同志的結合に確証はないが、少くとも倒幕派のリーダー二位ノ法印尊長の脳裏にはきわめて単純な図式が、すでにこの建永元年の時点で確立していたようである。単純な図式とは、法然を盟主とする専修念仏の徒は即鎌倉北条に氣脈を通ずる叛乱者なり、という先入観だった。

たしかに一部の過激な念仏ひじりたちは、信仰を超えて政治権力を夢見る者も実在した。後年現れた日蓮が、当時の日本国、八割方の人間が念仏信者だった、と断言したほどだ。このエネルギーを活用しない手はない、と主唱する政僧たち。「黒衣のひじり」たちがいたのは事実であらう。

この過激派は、数々のデマゴグをもまき散らしたらしい。

例えば、洛中で専修念仏の徒が蜂起する。機を一つにして坂東武者たちがなだれこんで、公卿貴族や体制派の

＜野鳥の巣食うお堂＞



僧たちを一網打尽にする。

そんなデマゴオグが白昼夢となって二位ノ法印尊長たちの脳裏を浸潤したことであろう。彼らが蜂起する前に、何か罫を仕掛けて搦め取らねばならない。

後鳥羽院の熊野出発を契機にして、尊長らは何かを策謀した気配が濃厚である。

侍従から大宮内府の実子を罷面したり、西北面ノ武士の交迭も、こうした策謀の機密が漏洩することを防ぐためだったかも知れない。

では、なぜ後鳥羽院は、偽装陽動の熊野参詣としたら、わざわざ京を留守にする必要があったのであろうか。それは、ここに始まる一つの物語を読みすすむにつれて、おのずと領解に達するはずである。

そのころ、清水坂を登ってゆく音羽山——通称清水寺は荒廃をきわめていた。所領の帰属をめぐって、しばしば南都北嶺の僧兵に襲撃されたのである。彼らは七堂伽藍を破壊しつくした。

すでに常住する僧はなく、わずかに残った半壊の諸堂も野鳥の巣になりつつあった。当然、参詣する善男善女の姿は途絶えた。

いたくこれを嘆いたのが法然である。毎日、東山づたいに出向くようになった。道俗の大衆を集めて説法会をひらいたのである。

法然がもっぱら説法の場合にえらんだのは、奥之院に近い阿弥陀堂だったと言われる。当時は滝山寺と呼ばれ、不断常行念仏も興行された。

後柏原天皇が「日本最初常行念仏道場」という勅額を贈っている点からも明らかであろう。中央に阿弥陀如来、左右に観音、勢至菩薩像をまつり、法然上人の木像もある。言ってみれば、東山の吉水禅房以外で、法然の「常説法場」となった貴重な遺跡であろう。

その日、法然の説法が終ると、十数人いた聴衆のうちから一人の男が歩み出た。なつかしげに両眼をうるませていた。

四十がらみ目鼻立ちも凛々しい男だ。ただし肌はまっ黒に陽焼けしており、着衣も汚ければなしである。肉体労働にたずわる職業と見てとれた。

「お師僧さま。おぼえていらっしゃるでしょうか」

「……」

法然は、しげしげと男の顔を覗きこんでいる。

「ご記憶ないのは当然のこと、かつてご迷惑をかけっ放しで去った者でございます」

「禅……禅勝房であろうが」

「おお、おぼえていて下さったのですか」

「忘れるわけがない。おぬしと共に涙したことがあったではない」

「もったいなや。あのようなことまでご記憶して頂けたとは……」

「ただ、余りにも変り過ぎていたのでな」

「ごもっともです。いまは、しがたい木工でございませう」

「木工を業としておるのか……これ、住蓮」

法然はかたわらにひかえる住蓮房をかえりみた。

「はい」

「このひじりはな、かつて遠江国の……」

一介の木工を法然は「ひじり」と呼んだのである。住蓮は、みすばらしい男の風体と見比べて淡い当惑をおぼえた。

(つづく)

二 編集後記 二

○去年の今頃もそうだった。やはり梅雨空にしめりがちな心をもてあまして、気鬱な気分になり込んでいた。そんな想いをこの欄にも書いたかもしれない。梅雨時の、どうしてもふさがちな気持ち、心持ちばかりでなく、わたしのこの身体までもおおい尽してしまおう。そんな怠惰な一日、次のような一句を作った。ご笑覧願いたい。

梅雨空の薄明かりなり昼寝時 ゆう一

○さて『浄土』誌は、昭和十年に刊行を開始した月刊誌であるが、すでに満四十五年をけみして、本年は四十六巻目を発行している次第である。この秋には、善導大師一千三百年の遠忌記念ともあわせて、いささか盛大なる(?)弊会創立四十五周年の式典を計画しているわけである。ところでこの機縁に接して、『浄土』誌においても、読者諸兄のご一文を広く頂戴いたしたいのである。本月号においては、『浄土』誌創

刊号以来の購読者であり、法然上人讃仰会発足以来の暖かいご後援者であられて西山浄土宗の長老渡辺杜水師にお願ひして、過ぐる年月を振り返って、『浄土』に掲載された多くの名文や逸話を迎っていたいただいたわけである。どうか全国各地の『浄土』誌の愛読者の皆さまからの暖かい思い、出話や、日頃お考えになられていることなどを、弊会法然上人讃仰会とその月刊機関誌である『浄土』をめぐる、お気軽におまとも願ひ、玉稿をお送り願えれば幸いである。七月号以降の誌面の賑わうことを、編集子としては今から楽しみにしている次第である。

○なお本月号は、期せずして俳文が多く掲載されたわけであるが、『浄土句集』欄もなかなか好評のことでもあり、読者諸兄の「句会だより」や「吟行記」などを広くお寄せ願ひたい。また「浄土句集」欄への投句の方も、俳友をお誘ひ願ひて、どんどん送っていただきたい。

「浄土」購読規定

会費一カ年 金二、五〇〇円

(送料不要)

浄土 四十六巻 六月号

昭和十年五月二日
第三種郵便物認可

昭和五十五年 五月二十五日 印刷
昭和五十五年 六月 一日 発行

編集人 宮林昭彦
発行人 佐藤密雄
印刷人 関 二三男
印刷所 長谷川印刷所

東京都千代田区飯田橋一十一一六

発行所 法然上人讃仰会

電話東京二六二局五九四四番
〒101 振替東京八一八二一八七番

＝最新刊＝

ブツダの生涯と古代インド仏教世界を現地網羅取材

『ブツダの世界』

—The World of Buddha—

東大名誉教授 中 村 元

駒沢大教授 奈良康明 編 著

大正大助教授 佐藤良純

＝写真撮影 丸 山 勇＝

◎仏教学・考古学・インド学の最新学問研究と、現地国考古学局の
学術協力のもと一年半の現地撮影取材とによって成った、わが国
で画期的な国際大型出版。

インド亜大陸未踏の領域に入って精密に把えた900点のカラー・
モノクロ写真を駆使し、釈尊の生涯と古代インド仏教の歴史を、
学界権威が900枚に論述。

最大規模の取材と最高水準の調査研究を集大成した記念碑的図
説インド仏教文化史。

B4変型判 上製クロス装 美麗貼函入 5色刷カバー付
カラー写真212頁 本文一色204頁 全416頁
現金定価 32,000円

発 行 学 習 研 究 社 〒145

東京都大田区上池台4-40-5

TEL 03 (720) 1111 内線 2737